

## 青年期における自我同一性の感覚と 役割受容および充実感との関係

佐藤 公代

(教育心理学教室)

赤澤 淳子

(今治明德短期大学)

寺川 夫央

(平成8年4月30日受理)

### Relationships between sense of identity, role-acceptance, and fulfillment sentiment in adolescence.

Kimiyo SATO, Junko AKAZAWA and Fuo TERAGAWA

#### 問題と目的

自我同一性 (ego identity) という用語を、広く一般に定着させたのは、Erikson, E. H. (1959) である。Erikson 自身は、自我同一性のもつ現象学的な主観的意味体験を重視し、これを「自我同一性の感覚」、すなわち、独自の自己が存在し、その自己が一貫しているという感覚、自分なりの価値観や信念をもっているという感覚、その自己が社会の中で何らかの役割を持ち、それが他者によっても認められているという心理的安定感、であると定義づけている。青年期は、この自我同一性確立の時期、つまり、社会との関係を構築しながら、自己を形成していく重要な時期である。したがって、Erikson の発達論の中で、自我同一性が青年期の発達課題として重視されているのも当然のことといえよう。この自我同一性の達成は、男女で異なる過程を辿る可能性があることが指摘されている (Erikson, 1974 ; Donovan, 1975 ; Waterman & Navid, 1977 ; Hodgson & Fisher, 1979)。

一方、自我同一性には、社会的な側面が含まれている以上、それは自己が社会の中で何らかの役割を受容することと、関係があると考えられる。この役割受容に注目したのが三川 (1988) である。三川は役割受容度を計測するために、役割受容尺度を作成した。この尺度は、自分の生き方や果たすべき役割に対する認識や肯定的評価を内容とするもので、以下の4つの下位尺度から構成されている。自分の生き方や生活に対する満足感を表す「役割満足」、自分の生き方や役割に対する肯定的評価を表す「役割評価」、果たすべき役割を遂行する能力や自信を表

す「役割有能感」、自分の役割の積極的な遂行を表す「役割達成」である。

この尺度を使用して、三川（1990）及び三川ら（1991）は、青年期及び成人期の役割受容度を検討した。その結果、青年期のように人生における主要な役割が未分化な状態では役割受容は低い、発達に伴って、その個人に適した役割が獲得され、それにつれて役割受容は高まってくる旨の結論を得た。

さらに、そこでは、青年期における自我同一性地位と役割受容および充実感との関連についても検討が試みられている。ちなみに、ここでいう自我同一性地位とは、Marcia（1965, 1966）の創案にかかるものであるが、三川ら（1989）は中西・佐方（1982）のものを参考にして考案した尺度を用いて自我同一性地位の測定を試みている。そこでは、「職業」・「価値」・「学業」の3領域の各々における、探索（Exploration）と傾倒（Comittment）の程度が各々8項目で測定され、各領域ごとに探索・傾倒の得点を組み合わせ、各々の被験者を領域ごとに、「達成」・「モラトリアム」・「早期完了」・「拡散」の4つの自我同一性地位に分類するものである。他方、充実感とは、青年が健康な自我同一性を統合していく過程で感じられる自己肯定的な感情である。三川らが採用した尺度は大野（1984）の創案にかかるものであり、それは4つの下位尺度から構成されている。すなわち、充実感の生活気分としての側面である「充実感気分—退屈・空虚感」、自立・甘えと自信の内容である「自立・自信—甘え・自信のなさ」、連帯意識・孤立意識を示す「連帯—孤立」、社会生活の中での自己の存在を肯定する信頼感と自己の将来に対する開いた時間的展望を示す「信頼（時間的展望）—不信（時間的展望の拡散）」の4つである。

これらの尺度を使用した三川ら（1991）の研究では、自我同一性地位と役割受容および充実感との間に、男女でやや異なった関連が示されることが明らかにされている。すなわち、男子では、探索あるいは危機を経験したあとに自己投入できる対象を見いだした「達成」地位が、役割受容、充実感ともに高かった。これに対して、女子では、探索あるいは危機の経験はむしろ役割受容や充実感を阻害することが示され、大きな迷いや探索を経験することなく自己投入の方向を決定している「早期完了」地位において役割受容および充実感が高くなっていたのである。

ただし、この三川ら（1991）の調査は、自我同一性地位と役割受容及び充実感との関連についての検討であって、自我同一性の感覚との関連について検討したものではない。しかし、役割受容及び充実感の意味を考えると、それらと自我同一性の感覚との関連は深いと考えられる。また、自我同一性地位と同様に、自我同一性の感覚と役割受容および充実感との関連には男女差がみられる可能性がある。

そこで、本研究では、青年期における自我同一性の感覚の高低によって役割受容度および充実感にどのような違いがあるかを検討することを第一の目的とする。また、男女において、自我同一性の感覚の高低によって、役割受容、充実感に違いがあるか否かを検討することを第二の目的とする。

その際、自我同一性の尺度としては、Eriksonの枠組みに従ってTan, A. L.ら（1977）が開発した自我同一性簡易尺度の日本語版を用いる。これは、田端（1978）によって邦訳されたもので、その有効性が立証されているものである（田端ら, 1978；田端・乾原, 1979；田端, 1980）。

## 方 法

- (1) 調査対象者 4年制国立大学大学生 男子285名（平均年齢19.3歳）、女子200名（平均年齢18.6歳）。
- (2) 調査時期 1993年9月。
- (3) 調査方法 質問紙法によるアンケート調査。
- (4) 調査内容
  - ① 自我同一性：Tan, A. L. ら（1977）が作成した自我同一性簡易尺度（EIS; Ego Identity Scale）の日本語版（田端, 1978）を用いた。この尺度は、12対24項目からなり、それぞれが0点か1点で合計を算出するものである。理論上のレンジは、0～12点であり、得点が高くなるほど、自我同一性の感覚は強くなるものとする。
  - ② 役割受容度：三川（1988）が開発した「役割受容尺度」の短縮版を用いた。この尺度は、「役割満足」「役割評価」「役割有能感」「役割達成」の4つの下位尺度からなる。各5項目、計20項目について、5段階評定にて回答を求めた。得点化にあたっては、各尺度の内容を表す方向から5～1点を与える。理論上のレンジは、各尺度5～25点である。
  - ③ 充実感：大野（1984）が開発した「充実感尺度」の短縮版を用いた。この尺度は、「充実感気分－退屈・空虚感」「自立・自信－甘え・自信のなさ」「連帯－孤立」「信頼－不信」の4つの下位尺度から構成されている。各5項目、計20項目について、5段階評定にて回答を求めた。得点化にあたっては、各尺度の内容を表す方向から5～1点を与える。理論上のレンジは、各尺度5～25点である。

## 結 果

### (1) 自我同一性得点と役割受容度および充実感との関係

自我同一性の得点によって、男女それぞれを3群に分けた。9点以上を高得点群、5点以上8点以下を中得点群、4点以下を低得点群とした（以下、高群・中群・低群と略す）。それぞれの人数は、男子においては、高群は22名（7.7%）、中群は181名（63.5%）、低群は82名（28.8%）であり、女子においては、高群は20名（10.0%）、中群は134名（67.0%）、低群は46名（23.0%）であった。

まず、男子における、高・中・低群の役割受容度に関する分散分析の結果を Table 1 に示した。役割受容度全体において、3群間で有意な差がみられた ( $F(2, 282) = 26.62, p < .001$ )。更に、最小有意差検定 (LSD 法) の多重比較の結果、高群 > 中群 > 低群の順に、役割受容度が有意に高くなっていることが明らかになった。

また、役割受容度のを構成する下位尺度における分散分析の結果、「役割満足」 ( $F(2, 282) = 11.95, p < .001$ )、「役割評価」 ( $F(2, 282) = 18.81, p < .001$ )、「役割有能感」 ( $F(2, 282) = 33.06, p < .001$ )、「役割達成」 ( $F(2, 282) = 11.92, p < .001$ ) というすべての下位尺度において有意な差がみられた。更に、最小有意差検定の結果、「役割満足」・「役割評価」・「役

Table 1 : 男子における自我同一性得点別にみた役割受容度

|          | 低 群<br>(N=82)    | 中 群<br>(N=181)   | 高 群<br>(N=22)    | 分散分析<br>F (2, 282) | 多重比較<br>(LSD法) |
|----------|------------------|------------------|------------------|--------------------|----------------|
| 役 割 受 容  |                  |                  |                  |                    |                |
| 1. 役割満足  | 13.00<br>(3.84)  | 14.42<br>(3.53)  | 16.91<br>(2.89)  | 11.95***           | 高>中>低          |
| 2. 役割評価  | 12.07<br>(3.97)  | 14.04<br>(4.28)  | 18.05<br>(3.82)  | 18.81***           | 高>中>低          |
| 3. 役割有能感 | 10.41<br>(3.18)  | 13.45<br>(3.54)  | 15.91<br>(2.65)  | 33.06***           | 高>中>低          |
| 4. 役割達成  | 15.61<br>(2.55)  | 17.09<br>(2.78)  | 18.23<br>(2.76)  | 11.92***           | 高・中>低          |
| 総 得 点    | 47.56<br>(12.27) | 55.96<br>(13.44) | 68.91<br>(10.81) | 26.62***           | 高>中>低          |

( ) 内は標準偏差 \*\*\* p &lt; .001

「役割有能感」では、高群>中群>低群の順に、得点が有意に高くなっていた。「役割達成」では、高群と中群の間には有意差はみられなかったものの、高群・中群は、低群より、有意に得点が高かった。

女子の結果であるが、Table 2 に示されるように、役割受容度全体において、男子と同様に、3群間に有意な差が示された ( $F(2, 197) = 17.02, p < .001$ )。更に、最小有意差検定の結果、高群>中群>低群の順に、役割受容度が有意に高くなっていることが明らかになった。

Table 2 : 女子における自我同一性得点別にみた役割受容度

|          | 低 群<br>(N=46)    | 中 群<br>(N=134)   | 高 群<br>(N=20)   | 分散分析<br>F (2, 197) | 多重比較<br>(LSD法) |
|----------|------------------|------------------|-----------------|--------------------|----------------|
| 役 割 受 容  |                  |                  |                 |                    |                |
| 1. 役割満足  | 13.74<br>(3.26)  | 15.46<br>(3.15)  | 16.85<br>(2.89) | 8.16 ***           | 高・中>低          |
| 2. 役割評価  | 13.04<br>(3.56)  | 15.69<br>(4.02)  | 18.05<br>(2.74) | 13.95 ***          | 高>中>低          |
| 3. 役割有能感 | 10.67<br>(2.86)  | 13.13<br>(3.43)  | 15.05<br>(2.80) | 15.27 ***          | 高>中>低          |
| 4. 役割達成  | 15.43<br>(2.13)  | 17.21<br>(2.53)  | 17.85<br>(2.76) | 10.60 ***          | 高・中>低          |
| 総 得 点    | 50.50<br>(11.80) | 59.98<br>(12.62) | 68.00<br>(9.44) | 17.02 ***          | 高>中>低          |

( ) 内は標準偏差 \*\*\* p &lt; .001

また、各下位尺度における分散分析の結果、「役割満足」( $F(2, 197) = 8.16, p < .001$ )、「役割評価」( $F(2, 197) = 13.95, p < .001$ )、「役割有能感」( $F(2, 197) = 15.27, p < .001$ )、「役割達成」( $F(2, 197) = 10.60, p < .001$ )というすべての下位尺度において有意差がみられた。更に、最小有意差検定の結果、「役割評価」・「役割有能感」では、高群>中群>低群の順に、得点が有意に高くなっていた。また、「役割満足」・「役割達成」では、高群と中群の間には差はみられなかったが、高・中群は低群より有意に得点が高いという結果を得た。

Table 3 : 男子における自我同一性得点別にみた充実感

|          | 低 群<br>(N=82)   | 中 群<br>(N=181)  | 高 群<br>(N=22)    | 分散分析<br>F (2, 282) | 多重比較<br>(LSD法) |
|----------|-----------------|-----------------|------------------|--------------------|----------------|
| 充 実 感    |                 |                 |                  |                    |                |
| 1. 充実感気分 | 12.59<br>(4.26) | 14.28<br>(4.08) | 17.64<br>(4.19)  | 13.64 ***          | 高>中>低          |
| 2. 自立・自信 | 14.01<br>(3.48) | 15.56<br>(3.32) | 16.82<br>(3.22)  | 8.75 ***           | 高・中>低          |
| 3. 連 帯   | 13.84<br>(3.45) | 16.43<br>(3.65) | 18.05<br>(3.46)  | 19.68 ***          | 高>中>低          |
| 4. 信 頼   | 15.46<br>(3.21) | 16.94<br>(2.95) | 18.18<br>(2.97)  | 9.84 ***           | 高・中>低          |
| 総 得 点    | 57.67<br>(9.48) | 63.87<br>(9.15) | 70.86<br>(10.78) | 21.53 ***          | 高>中>低          |

( ) 内は標準偏差 \*\*\* p<.001

次に、男子における、高・中・低群の充実感に関する分散分析の結果を Table 3 に示した。充実感全体において、3群間で有意な差がみられた ( $F(2, 282) = 21.53, p < .001$ )。更に、最小有意差検定 (LSD 法) の多重比較の結果、高群>中群>低群の順に、充実感が有意に高くなっていることが明らかになった。

また、充実感を構成する下位尺度における分散分析の結果、「充実感気分-退屈・空虚感」( $F(2, 282) = 13.64, p < .001$ )、「自立・自信-甘え・自信のなさ」( $F(2, 282) = 8.75, p < .001$ )、「連帯-孤立」( $F(2, 282) = 19.68, p < .001$ )、「信頼-不信」( $F(2, 282) = 9.84, p < .001$ )というすべての下位尺度において有意な差がみられた。更に、最小有意差検定の結果、「充実感気分-退屈・空虚感」・「連帯-孤立」では、高群>中群>低群の順に、得点が有意に高くなっていた。「自立・自信-甘え・自信のなさ」では、高群と中群の間には有意差はみられなかったものの、高群・中群は、低群より、有意に得点が高かった。

女子の結果であるが、Table 4 に示されるように、充実感全体において、男子と同様に、3

Table 4 : 女子における自我同一性得点別にみた充実感

|          | 低 群<br>(N=46)   | 中 群<br>(N=134)  | 高 群<br>(N=20)   | 分散分析<br>F (2, 197) | 多重比較<br>(LSD法) |
|----------|-----------------|-----------------|-----------------|--------------------|----------------|
| 充 実 感    |                 |                 |                 |                    |                |
| 1. 充実感気分 | 13.80<br>(4.27) | 16.00<br>(3.66) | 18.00<br>(4.23) | 9.49 ***           | 高>中>低          |
| 2. 自立・自信 | 13.37<br>(3.09) | 14.95<br>(2.76) | 16.65<br>(2.60) | 10.36 ***          | 高>中>低          |
| 3. 連 帯   | 15.02<br>(4.04) | 16.96<br>(3.60) | 18.40<br>(3.36) | 7.25 ***           | 高・中>低          |
| 4. 信 頼   | 15.43<br>(2.60) | 17.15<br>(2.69) | 18.10<br>(3.18) | 9.13 ***           | 高・中>低          |
| 総 得 点    | 58.04<br>(7.98) | 65.31<br>(8.33) | 70.60<br>(9.41) | 19.49 ***          | 高>中>低          |

( ) 内は標準偏差 \*\*\* p<.001

群間に有意な差が示された ( $F(2, 197) = 19.49, p < .001$ )。更に、最小有意差検定の結果、高群 > 中群 > 低群の順に、充実感が有意に高くなっていることが明らかになった。

また、各下位尺度における分散分析の結果、「充実感気分-退屈・空虚感」( $F(2, 197) = 9.49, p < .001$ )、「自立・自信-甘え・自信のなさ」( $F(2, 197) = 10.36, p < .001$ )、「連帯-孤立」( $F(2, 197) = 7.25, p < .001$ )、「信頼-不信」( $F(2, 197) = 9.13, p < .001$ )というすべての下位尺度において有意差がみられた。更に、最小有意差検定の結果、「充実感気分-退屈・空虚感」・「自立・自信-甘え・自信のなさ」では、高群 > 中群 > 低群の順に、得点が高くなっていた。また、「連帯-孤立」・「信頼-不信」では、高群と中群の間には差はみられなかったが、高・中群は低群より有意に得点が高いという結果を得た。

## (2) 自我同一性得点の高低における役割受容度および充実感の性差

まず、男女全体の自我同一性得点、役割受容度、充実感の各平均値、標準偏差および男女間の平均値検定の結果を Table 5 に示した。

自我同一性得点における男女間の平均値検定の結果、有意な差はみられなかった。

役割受容度における男女間の平均値検定の結果、女子が男子より有意に高い値であった ( $t=2.65, df=484, p < .01$ )。さらに、4つの下位尺度において男女間の平均値検定をした結果、「役割満足」( $t=3.19, df=484, p < .01$ )、「役割評価」( $t=3.95, df=484, p < .001$ )において有意差があった。女子は男子よりも、「役割満足」・「役割評価」の得点が高かった。「役割有能感」・「役割達成」においては差がなかった。

Table 5 : 自我同一性得点・役割受容度・充実感における性差

|          | 男子 (N=285)   | 女子 (N=200)   | t 値      |
|----------|--------------|--------------|----------|
| 自我同一性得点  | 5.69 (1.93)  | 5.88 (1.91)  | n. s.    |
| 役割受容     |              |              |          |
| 1. 役割満足  | 14.20 (3.61) | 15.21 (3.26) | 3.19 **  |
| 2. 役割評価  | 13.79 (4.42) | 15.32 (4.06) | 3.95 *** |
| 3. 役割有能感 | 12.77 (3.74) | 12.76 (3.48) | n. s.    |
| 4. 役割達成  | 16.75 (2.81) | 16.87 (2.59) | n. s.    |
| 総得点      | 57.51(11.21) | 60.15(10.51) | 2.65 **  |
| 充実感      |              |              |          |
| 1. 充実感気分 | 14.05 (4.33) | 15.68 (4.07) | 4.21 *** |
| 2. 自立・自信 | 15.21 (3.45) | 14.76 (2.95) | n. s.    |
| 3. 連帯    | 15.81 (3.78) | 16.66 (3.79) | 2.44 *   |
| 4. 信頼    | 16.61 (3.13) | 16.86 (2.82) | n. s.    |
| 総得点      | 61.68(10.74) | 63.95(10.00) | 2.38 *   |

( ) 内は標準偏差 \*\*\*  $p < .001$  \*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$

充実感における男女間の平均値検定の結果、女子が男子より有意に高い値であった ( $t=2.38, df=484, p < .05$ )。さらに、4つの下位尺度において男女間の平均値検定をした結果、「充実感気分-退屈・空虚感」( $t=4.21, df=484, p < .001$ )、「連帯-孤立」( $t=2.44, df=484, p < .05$ )において有意な差がみられた。女子は男子よりも「充実感気分-退屈・空虚感」・「連帯-孤立」の得点が高かった。

次に、自我同一性得点の高・中・低群別に男女間の平均値検定を行ったところ、いずれの群内においても有意な差はみられなかった。そこで、自我同一性得点の高・中・低群別に役割受容度および充実感における男女間の平均値検定を行い、その結果を Table 6 に示した。

役割受容度において性差がみられたのは、低群 ( $t=2.24, df=127, p<.05$ )、および中群 ( $t=2.72, df=314, p<.01$ )

であり、低群の女子は低群の男子より、中群の女子は中群の男子より高い値を示すことがわかった。さらに、4つの下位尺度において、高・中・低群別に男女間の平均値検定をした結果、中群にのみ、「役割満足」( $t=2.75, df=314, p<.01$ )、「役割評価」( $t=3.50, df=314, p<.001$ )に有意な差があった。「役割満足」・「役割評価」とも中群の女子は、中群の男子より高い値を示すことがわかった。高群では、役割受容全体、4つの下位尺度のいずれにおいても性差がみられなかった。

充実感では、高・中・低群のどの群においても、性差はみられなかった。さらに、4つの下位尺度において、高・中・低群別に男女間の平均値検定をした結果、中群にのみ、「充実感気分-退屈・空虚感」( $t=3.93, df=314, p<.001$ )に性差がみられた。中群の女子は中群の男子より「充実感気分-退屈・空虚感」において高い値を示すことがわかった。また、「自立・自信-甘え・自信のなさ」では、中群において傾向差 ( $t=1.78, df=314, p<.1$ ) がみられ、中群の男子は中群の女子より「自立・自信-甘え・自信のなさ」の得点が高い傾向があった。一方、「連帯-孤立」では、低群において傾向差 ( $t=1.67, df=127, p<.1$ ) がみられ、低群の女子は低群の男子よりも「連帯-孤立」の得点が高い傾向を示した。なお、高群では、充実感の下位尺度のいずれにおいても性差がみられなかった。

## 考 察

### (1) 自我同一性得点と役割受容度および充実感との関係

青年期においては、男女ともに、自我同一性の感覚が相対的に強いものの方が、役割受容度が高くなっていることが明らかになった。また、4つの下位尺度においても、3群間にすべて有意な差が示されていることから、自我同一性の感覚が強いものほど、自分自身に与えられた役割に満足し、自分の役割を肯定的に評価し、役割を遂行する能力や自信を持ち、自分の役割を積極的に遂行しようとしていることが示された。つまり、自我同一性の感覚と役割受容度の

Table 6 : 自我同一性得点の高・中・低群別にみた役割受容度および充実感の性差

|          | 低 群     | 中 群     | 高 群    |
|----------|---------|---------|--------|
|          | (N=128) | (N=315) | (N=42) |
|          | 男-女     | 男-女     | 男-女    |
| 役 割 受 容  |         |         |        |
| 1. 役割満足  |         | <<      |        |
| 2. 役割評価  |         | <<<     |        |
| 3. 役割有能感 |         |         |        |
| 4. 役割達成  |         |         |        |
| 総 得 点    | <       | <<      |        |
| 充 実 感    |         |         |        |
| 1. 充実感気分 |         | <<<     |        |
| 2. 自立・自信 |         | (>)     |        |
| 3. 連 帯   | (<)     |         |        |
| 4. 信 頼   |         |         |        |
| 総 得 点    |         |         |        |

(<) ;  $p<.10$ , < ;  $p<.05$ , << ;  $p<.01$ , <<< ;  $p<.001$

間には、密接な関係があることがわかった。心理的安定感が強いものほど、自分の果たすべき役割に対する認識を持ち、自分の役割を肯定的に評価していると考えられる。

一方、男女ともに、低群では、いずれの下位尺度においても、高・中群よりも有意に低い得点であることが特徴的である。これは、自我同一性の感覚の弱さと役割受容度の低さとの関係を如実に示しているといえる。

また、充実感においても役割受容度と同様の結果が示され、青年期では男女ともに、自我同一性の感覚が強いものの方が、充実感が高くなっていることが明らかになった。また、4つの下位尺度においても、3群間にすべて有意な差が示され、自我同一性の感覚が強いものほど、充実感のある生活を送り、自立しており、自信や連帯意識を持ち、自己の将来に対する開いた時間的展望を持っていることが示された。つまり、自我同一性の感覚と充実感の間にも密接な関係があることがわかった。このように、自我同一性の感覚が強いものほど、自己肯定的な感情をもっていると考えられる。

充実感においても、役割受容と同じく、男女ともに、低群では、いずれの下位尺度においても、高・中群よりも有意に低い得点であることから、自我同一性の感覚の弱さと充実感の低さとの関係も明らかとなった。

## (2) 自我同一性得点の高低における役割受容度および充実感の性差

まず、全体としては、自我同一性得点において性差は見られなかった。これは、田端(1980)の結果と一致している。これまでに、男性と女性とは、異なる自我同一性の達成過程を辿るのではないかということが指摘されてきた(Erikson, 1974; Donovan, 1975; Waterman & Navid, 1977; Hodgson & Fisher, 1979; 三川ら, 1991)が、今回用いた尺度は、自我同一性の感覚を量的に規定するものであるから、男女間において、差が認められなかったものと考えられる。

役割受容度については、全体的としてみると、女子の方が男子より役割受容度が高いということが示された。下位尺度ごとに詳細にみると、「役割満足」および「役割評価」において、女子は男子より得点が高く、女子の方が、自分の生き方や生活に対して満足しており、自分の生き方や役割に対し、肯定的に評価していることがわかった。三川(1990)の調査においては、女子の場合には男子と異なり、高校生から大学生にかけて「役割評価」が高くなることが示されている。その理由として、彼は「女子は、4年制の大学に進学し、大学生という役割を取ることが自分の生き方や役割への肯定的評価を高めている」と考察している。本研究においても、同様のことが言えるのではないだろうか。

充実感においても、女子の方が男子より、充実感が高いということが示された。下位尺度ごとに詳しくみると、「充実感気分—退屈・空虚感」および「連帯—孤立」において、女子は男子より得点が高かった。つまり、女子の方が男子より、充実感に満ちた生活を送っており、連帯意識が強いことが窺える。Hodgson & Fisher(1979)によれば、男性では、同一性達成地位が最も親密性が高いのに比べ、女性ではどの地位でも親密性が高いということである。つまり、一般に、女性は男性より他者との親密性が高いということが、連帯感の男女差としてあらわれているのだと考えられる。

自我同一性得点の高・中・低群内において性差がみられなかったことから、各群内では、自

我同一性の感覚は男女とも同程度であると考えられる。そこで、自我同一性の感覚が同程度の間で役割受容や充実感に性差があるかどうかを考察する。

まず、高群における男女比較では、役割受容度および充実感において、性差は示されていない。つまり、自我同一性の感覚が相対的に強いものは、性差に関係なく、自分の生き方や果たすべき役割に対する認識を持ち、自分の生き方について肯定的に評価しているのである。同一性の感覚が強いものは、男女に関わりなく、心理的に安定していると考えられる。

次に、中群における男女比較では、役割受容度において性差がみられ、女子は男子より役割受容度が高い。下位尺度の「役割満足」および「役割評価」においても性差が示され、女子の方が男子より、自分の生き方や生活に対する満足感が高く、自分の役割に対して肯定的な評価をしていた。また、充実感の下位尺度である「充実感気分－退屈・空虚感」においても、中群では性差がみられ、女子の方が男子より、充実感が高かった。「自立・自信－甘え・自信のなさ」の下位尺度では、男女間に傾向差がみられ、男子の方が女子より、独立心や自信をもつ傾向にあることが示唆された。

最後に、低群における男女比較では、中群と同様に、役割受容度全体において性差がみられ、低群の男子は女子より、自分の生き方や生活に対する満足感が低く、自分の役割に対して肯定的な評価をしていないことがわかる。また、充実感では、下位尺度の「連帯－孤立」において傾向差がみられ、男子は女子より、孤立感が高い傾向にあることが示唆された。三川ら(1989)によれば、男子では、自我同一性の確立後に親密性が確立され、女子ではむしろ親密性が先に達成され、その後自我同一性が確立されるということである。このことが、低群における男子の孤立感を高めていると考えられる。

以上、自我同一性の感覚の程度によって、役割受容度および充実感の性差を検討した結果、自我同一性の感覚が強いものは、ともに役割受容度および充実感が高く、男女差はないことがわかった。しかし、中群においては、自我同一性の感覚の程度には性差がみられなかったにもかかわらず、役割受容度や充実感に性差が示されたことは、男子と女子とが自我同一性の達成過程において異なった経路を辿ることを窺わせる。また、低群においても、下位尺度では明確な性差が認められなかったことから、全体における性差は、中群の男女差によるところが大きいといえよう。

なお、本研究では、自我同一性の感覚を量的指標として取り扱ったが、今後は感覚の質的な内容、具体的には、構成される項目の分析などを詳細に検討する必要がある。また、男女の自我同一性達成の経路の相違点を検討するために、自我同一性の縦断的研究が今後の課題となろう。

## 要 約

本研究の目的は、青年期男女において、1)自我同一性の感覚の高低によって、役割受容度および充実感にどのような違いがあるかを検討すること、2)男女において、自我同一性の感覚の高低により、役割受容、充実感に違いがあるかを検討することである。そのため、青年期の男女485名を対象としたアンケート調査を行い、得られた結果を分析した。主な結果を以下に示す。

- (1) 青年期においては、男女ともに、自我同一性の感覚が相対的に強いものの方が、役割受容度および充実感が高く、それらの間には密接な関係があることがわかった。つまり、自我同一性の感覚が相対的に強いものは、自分の果たすべき役割に対する認識を持ち、自己肯定的な感情をもっていると考えられる。
- (2) 自我同一性の感覚が強いものは、男女ともに役割受容度および充実感が高く、性差がないことがわかった。しかし、自我同一性の感覚が中程度のものにおいては、自我同一性の感覚の程度には性差がみられなかったにもかかわらず、役割受容度や充実感に性差が示された。このことは、男子と女子とが自我同一性の達成過程において異なった経路を辿ることを窺わせる。

## 文 献

- 赤澤淳子・寺川夫央 1993 ライフスタイル別にみた青年期女子の自我同一性と性役割観 中四国心理学会第49回大会発表論文集, 26, p.46.
- Donovan, J. M. 1975 Identity status: Its relationship to Rorschach performance and to daily life pattern. *Adolescence*, 10, pp.29-44.
- エリクソン, E. H. 小此木啓吾(訳編) 1990 『自我同一性』 誠信書房(Erikson, E. H. 1959 *psychological issues identity and the life cycle*. International Universities press, Inc.)
- Erikson, E. H. 1974 One more the inner space. *Life History and Historical Moment*. pp.225-247.
- Hodgson, J. W. & Fisher, J. L. 1979 Sex differences in identity and intimacy development in college youth. *Journal of Youth & Adolescence*, 8, pp.37-50.
- 井上知子・三川俊樹・芳田茂樹 1989 青年期における人格形成と精神的健康に関する研究 (I) 追手門学院大学文学部紀要, 23, pp.1-17.
- 井上知子・三川俊樹・芳田茂樹 1990 青年期における人格形成と精神的健康に関する研究 (IV) 追手門学院大学文学部紀要, 24, pp.39-48.
- Marcia, J. E. 1965 Determination and construct validity of ego identity status. *Dissertation Abstracts*, 25 (11-A), 6763. (Ohio State University. Dissertation, 1964)
- Marcia, J. E. 1966 Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality & Social Psychology*, 3, pp.551-558.
- 三川俊樹 1988 成人期における役割特徴と役割受容 追手門学院大学文学部紀要, 22, pp.1-22.
- 三川俊樹・井上知子・芳田茂樹 1989 青年期における人格形成と精神的健康に関する研究 (II) 追手門学院大学文学部紀要, 23, pp.19-36.
- 三川俊樹 1990 ライフ・キャリアの視点からみた役割受容 進路指導研究, 11, 10-17.
- 三川俊樹・井上知子・芳田茂樹 1990 青年期における人格形成と精神的健康に関する研究 (III) 追手門学院大学文学部紀要, 24, pp.23-37.
- 三川俊樹・井上知子・芳田茂樹 1991 青年期における人格形成と精神的健康に関する研究 (V) 追手門学院大学文学部紀要, 25, pp.51-67.
- 中西信男・佐方哲彦 1982 青年後期の自我同一性地位の発達 昭和56年度文部省教育研究開発に関する調査研究報告書『幼児・児童・生徒の心身発達の状況と学校教育への適応について』 関西青年心理研究会 pp.1-33.
- O'Connell, A. N. 1976 The relationship between life style and identity synthesis and resynthesis in traditional, neotraditional, and nontraditional women. *Journal of Personality*, 44, pp.675-688.
- 岡本祐子他(編) 1994 『女性のためのライフサイクル心理学』 福村出版
- 大野久 1984 現代青年の充実感に関する一研究 教育心理学研究, 32, pp.100-109.
- 佐藤公代・赤澤淳子・寺川夫央 1996 青年期女子における自我同一性と性役割意識に関する研究—将来希望するライフスタイルによる差異の検討を中心として— 愛媛大学教育学部紀要 第I部 教育科学, 42,

pp. 47-60.

- 田端純一郎 1978 自我同一性簡易尺度作成の基礎研究 関西学院大学教育学科研究年報, 4, pp. 66-69.
- 田端純一郎・乾原正・西田仁美・古瀬謹一 1978 自我同一性の発達の研究 日本教育心理学会第20回大会論文集, 20, pp. 712-713.
- 田端純一郎・乾原正 1979 自我同一性とライフスタイル 日本教育心理学会第21回総会発表論文集, 21, pp. 224-225.
- 田端純一郎 1980 簡易尺度による自我同一性の研究 臨床教育心理学研究, 6, pp. 12-16.
- Tan, A. L., Kendis, R. J., Fine, J. T., & Porac, J. 1977 A short measure of Eriksonian ego identity. *Journal of Personality Assessment*, 41, pp. 279-284.
- 鎌幹八郎・山本力・宮下一博 (共編) 1984 『自我同一性研究の展望』 ナカニシヤ出版
- 鎌幹八郎 1990 『アイデンティティの心理学』 講談社
- Schenkel, S. & Marcia, J. E. 1972 Attitudes toward premarital intercourse in determining ego identity status in college women. *Journal of Personality*, 40, pp. 472-482.
- Watermann, C. K. & Nevid, J. S. 1977 Sex difference in the resolution of the identity crisis. *Journal of Youth & Adolescence*, 6, pp. 337-342.